

平成28年度自己評価シート(中間評価まとめ)

校番	068	学校名	広島県立祇園北高等学校	校長氏名	柘磨 昭孝	☎・定・通	☎・分
----	-----	-----	-------------	------	-------	-------	-----

1 評価結果の分析

(1) 生徒の主体的な学びを促す授業づくりの推進と業務改善の推進

ア 第1回授業満足度における生徒の肯定的指数は3.44であり、目標を超えた。I C Eを軸とする授業構築の実施率も、84%と目標を超えている。定期試験におけるEレベルの出題率は、目標の10%を下回り、8.5%であった。

イ 業務改善については、「生徒と向き合う時間の確保」及び「教職員のモチベーション向上」に向けて取組計画を策定した。

(2) 高い志を持った生徒の進路実現と理数コースの充実

ア・3年は5月・7月に模試結果や宅習記録などをもとに進路検討会議を実施し、三者懇談や面談指導を行った。1年は文理選択を兼ねた進路検討会議、2年は科目選択を含めた進路検討会議を8月下旬に行った。その後、各学年ともに担任や教科担当が生徒に対して学習上の助言を行った。長期休暇中の補習や放課後補習は計画的に実施している。

・進路意識の喚起に向け、学年集会や進路LHRを進路指導部が企画し、各学年で生徒の実態に応じた指導を行っている。進路だよりは、1年4回、2年8回、3年は3回発行した。進路講演会を1年は既に2回実施し、2年は12月以降に実施する。

・1年7月模試偏差値54以上は54名、2年69名であった。3年の6月マーク模試の偏差値50以上5-8文系59名(昨年29名)、5-7理系29名(昨年18名)、9月マーク模試は、5-8文系31名(昨年20名)、5-7理系21名(昨年13名)であった。

イ・第1回オープンキャンパスへの中学生・保護者の参加は1,086名であり、全てのプログラムで95%以上の肯定的評価を得た。

・中学生や地域に対する広報を本校HPで行ったが、更にタイムリーな更新が必要である。学年や部活動の更新回数少なく、更新回数は70回であった。理数コースのパンフレットで紹介する教育内容を精選し、掲載する写真にも工夫を凝らした。

ウ 「中高生の科学研究活動推進プログラム」が9月から本格的にスタートした。

(3) 北高生としての自覚とグローバル社会で逞しく生き抜く力の育成、個に応じた指導や支援の充実

ア 宅習時間は、4月(1年46%、2年46%、3年4%)、6月(34%、36%、17%)、9月(35%、38%、42%)であった。

イ 一日の平均遅刻者数は4.36と昨年同時期と変わらない。警報発令時の遅刻数も数えており、実際は減少している。

ウ ボランティア活動としてのルワンダへのシューズ寄贈は年々充実し、今年は「ひろしま県民テレビ」で取り上げられた。

エ 部活加入率は5月1日現在84%で目標をやや下回った。これまでの中国大会以上出場の部活数は、運動部3、文化部1である。

オ 分掌会議で生徒の状況共有と支援方法を検討し、月1回の教育相談は十分に活用され、サポート委員会で早期に連携・協議することが生徒の支援につながっている。

カ 美化強化月間や大掃除を通して、美化委員会を中心に積極的に清掃活動に取り組む意識が高まっている。

2 今後の改善方策

(1) 生徒の主体的な学びを促す授業づくりの推進と業務改善の推進

ア I C Eモデルを軸とした授業づくりの取組は、昨年度よりも組織的な取組となった。しかし、Eレベルの授業展開や活用問題が生徒の主体的な学びを促進するものになっているかなど、その精度をさらに分析・検討する。10月の公開研究授業では、I C Eを軸とした授業をテーマとして実施し、全教職員が互いに研鑽し合う指導力の向上の機会とする。

イ 業務改善に向けて会議の改善や起案プロセスの効率・簡素化、校務分掌の再編、部活動の休養日設定により、生徒と向き合う時間の確保を図るとともに、業務分担を明確にし、PDCAサイクルに則って業務を遂行することにより職員の参画意識を高める。

(2) 高い志を持った生徒の進路実現と理数コースの充実

ア 進路検討会を継続し、成績中間層や進路志望が不明確な生徒、教科バランスに課題を抱える生徒などに対する面談を組織的に行う。3年については、個の情報を共有し、センター試験や二次試験対策、小論文対策など、進路実現に向けた組織的な指導を行う。

イ 第2回オープンキャンパスも、受験体験談を組み込むなど本校生徒が中心となって進める。夏季の第1回オープンキャンパスに向けて、業務用扇風機の利用や模擬授業実施会場の確保について今年度中に検討する。

ウ ホームページの更新回数を増加させるため、掲載するフォーマットを定め、各部署への更新依頼をタイムリーに行う。

エ 「中高生の科学研究活動推進プログラム」は、後半に向けて研究活動を効率よく行い、遅れを取り戻す。実験等は、放課後にも活用していく。また、時間割等を工夫して2時間連続で実験が可能となるようなやり方も検討していく。

(3) 北高生としての自覚とグローバル社会で逞しく生き抜く力の育成、個に応じた指導や支援の充実

ア 学力向上に向けて、特に活用コアスクールの事業と絡めた授業づくりのための環境整備と取組の強化を進め、各教科が教科会議で内容を検討し、実践していく。

イ 宅習時間調査の中で、週10時間未満の生徒に対して進路目標や学習方法を含めた具体的な面談指導を実施する。

ウ 遅刻者に対する個別指導をきめ細かく行うとともに、健康管理の重要性を訴え、受験を控えた3年生に対する指導を強化する。

エ 交通マナーについては、委員会を活用し、生徒が主体となるマナーアップの取組を実施する。

オ 保護者が教育相談体制について「よくわからない」とする回答が10%あり、他校の実践例を参考に周知方法を工夫する。

カ 「掃除に積極的に取り組んでいる」という回答は60.4%と肯定的回答が減少し、環境美化意識を高めるため、「校内美化と学習効果」、「校内美化とクラスづくり」等について、日々の学校生活の中で意識させ、行動につなげる場を組織的に設定する。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策

学校の経営ビジョンが明らかにされ、学力向上と主体的な学びを促す授業づくり・文武両道の推進・豊かな感性の育成を中心として教職員が目指す方向性が示されており、評価分析や今後の改善方策などにも、しっかり取り組んでいるという評価をいただいた。今後、経営目標の達成に向けて、保護者や関係機関との連携を密にするとともに、改善方策に基づいて教職員が一丸となって更に具体的な取組を組織的・計画的に推進していきたい。